

## 《研究ノート》

## 『デア・キャンプ』誌上のスポーツ論と

## 労働者スポーツ

上野 卓郎

オーストリア社会民主党の月刊誌『デア・キャンプ』<sup>\*</sup>には、第一次大戦前三篇、戦後四篇のスポーツと労働者スポーツに関する論文が掲載されている。それらの内容を紹介し、オーストリア労働者スポーツ運動史の証言として今後の研究に役立てることが本稿の目的である。オーストリア労働者スポーツ運動史については、「オーストリア労働者スポーツ・身体文化同盟」(ASKÖ、一九二四年創立)書記長ハンス・ガストゲープの簡単な記述からクロノジカルな沿革は知ることができ、<sup>1</sup>が、実証的な研究は今後の課題として残されている。本稿では、ガストゲープの小史を参照しつつ、『キャンプ』論文におけるオーストリアの運動の状況と課題、スポーツ論の展開を見ることにする。

オーストリア労働者スポーツ運動はその全国的組織的結集体を第一次大戦後の一九一九年に初めてもった。「労働者・兵士

スポーツクラブ連合」(VASS)がそれである。ドイツ労働者体育同盟の第十七地区(中心ウィーン)と第十八地区(中心インスブルック)に組織された体育クラブ、水泳、自転車クラブ、旅行クラブ「自然の友」、それにハプスブルク帝国解体後の国民軍兵士が合同した。労働者フットボール運動の創造が挫折し、ブルジョアクラブと試合を続けるフットボールクラブの加入問題でVASSは分裂し、一九二〇年に創設された社会主義労働者スポーツインタナショナル(SASSI)への代表権獲得のために、一九二四年にASKÖと名称変更する。その間に国民軍は反動化したのでASKÖには加わらず、のちに共和国防衛同盟が一九二六年ウィーン労働者スポーツ祭典を契機に加入する。一九二七年SASSIヘルシンキ会議でASKÖ会長ユルス・ドイチュがSASSI会長に選ばれ、一九三一年ウィーン第二回労働者オリンピック開催も決定され、オーストリア労働者スポーツ運動の最高揚期を迎える。ガストゲープの小史にあるASKÖ組織構成表によると、一九二九年時点で十六団体、二万五千余の会員、一万五千人の児童が組織されていた。<sup>2</sup> SASSIではドイツに次ぐ勢力であった。(ドイツは同年で一二万弱)<sup>3</sup>

『キャンプ』論文の第一次大戦前の三篇は、二篇の短文のスポーツ論(労働者との関係で論じているが、正確には労働者スポーツ論とはいえない)と一篇の労働者文化・教育運動の成果の報告である。運動史との関わりでは後の一篇が興味深いが、二篇のスポーツ論をまず簡単に紹介したい。

## 2

E・ストイエツツ「労働者はスポーツを行うべきか」(一九〇九年)は、スポーツの規定を次のように言う。スポーツは「自分自身のために行う諸力の自由な遊戯」で、芸術と同様「価値ある教育手段」だが、遊戯と区別されるその「本質的メルクマル」は、平均以上の能力をもつ大衆による・一定の身体的・精神的能力を要求する運動活動(Bewegungstätigkeit)である(競争はこれに入らない)。スポーツが趣味から文化エレメントとなるのは「分業の原理による人間の一面化とそれによる身体的・精神的健康の損傷に対する補償的作用」が発見されるからである。このようなスポーツの規定から労働者にとってのスポーツ活動の意義が確認される。そのさい次のように述べるところに注意したい。スポーツは「目的がないだけに一層理想的である」(シュタイニツァー『アルピニストの心理』)というのも、またスポーツ活動に有用な契機をみる人々と同様に正しいという。無目的性と有用性という(現代のスポーツ論にもつきまとう)規定が単に「同様に正しい」ということですまされていく。次にスポーツの効果がとりあげられ、相互顧慮、制御、自由な交通という効果によって「人間的なものがより純粹に、より美しく正当な権利を得る」と謳い上げる。興味を引くのは、スポーツをする労働者は要求が多くなるという論理である。スポーツ活動の結果、多くの新しい欲求を知る、それは一度認識するとなくならないから、その充足のために自己の状態

の改善に努める、故に精力的な活動家になる。この論理はその後の現実において手ひどい反証をうける。これは自然成長論の「労働者スポーツ」論での素朴な表現と特徴づけることができる。もちろんこの論者は議論の意図を当時のスポーツ有言論ないし消極論(スポーツは労働者を階級利益の追求からそらしてしまふものだ)への批判においている。しかし、批判の対象の側の論理の方がその後の現実に対応することになる。こうしてその現実を変革する労働者スポーツ運動への方向は理論的にもまだ見出されていない。

次のF・ラインホルト「大衆スポーツ」(一九一二年)は、オーストリアでのフットボールの普及の状況を描きながら、労働者が階級利益追求を放棄せずにスポーツ活動をすすめるうえでの留意点を述べる。まずフットボールがイギリスでは誰を担い手としているかということから論じる。選手の仕事から労働者であるのは明らかだと言う。観衆も圧倒的に労働者であり、その生活の中でフットボールの役割の大きさから、支配階級によるプロレタリアートの政治的活動弱化的ための手段としてこのスポーツの意識的利用が強力に作用すると説明し、「イギリスにあるものは早晩わが国にも生じるだろう」と言う。——オーストリアにこのスポーツはおよそ二〇年前にイギリスからやってきた。当初は「上流」家族の子弟が行なうが、このスポーツに特に内在する傾向、成績をたえず高めねばならない傾向によってブルジョアの創始者自身が下層人民階級の野生の力から汲みとることを余儀なくする。競技者と観衆の大部分はイギリ

ス同様、労働者と従業員である。支配者にこのスポーツの「意義」が意識にのぼりはじめるのはある発展段階からである。この段階にドイツもオーストリアも達している。ドイツでは競技者と観衆の主要部分は「新中間層」として把握される。大工業家がクラブづくりを促進し、皇族が保護をひきうけ賞を与える。ドイツのフットボール選手が民族的で愛国主義的であるのは不思議ではない。民族的対立が全体の発展を緩慢にし、ヴェールをかぶせるとしても、これはオーストリアにも妥当する。——こうした普及状況の描写のち論者は自問自答する。事態がイギリスのようになるまで待つべきか、確かに否だ。だがそうするとこの発展にどんな態度をとるべきか。結論は、この普及をくいとめることは不可能だし必然的でもないというのであった。フットボールを大衆スポーツにするのは、近代プロレタリアートの心理学に一致すること（分業・協業が指導的理念であり、連帯がその競技の根本思想だという）と、健康面（事故が稀だという）、経済面（個人にとって低廉）でのメリットが理由として論じられる。それでは先の状況描写で示された支配階級のスポーツ利用に対してはどんな態度をとるべきか。そこでは単に道義的よびかけしかない。つまり、大陸のブルジョアジーはイギリスで非常に「良い」成果を示した手段をのがしはしないだろう、だから、労働者よ競技は楽しみなさい。しかし諸君はプロレタリアだということを忘れるな、諸君の階級に対する諸君の義務を忘れるなというのであった。この論理は戦後「大衆スポーツ理念の悲劇」として総括される。

## 3

労働者スポーツ運動は労働者文化・教育運動の一分野として成長した。戦前の運動を、K・チェルマーク「労働者運動の文化的達成」(一九一四年)が教えてくれる。彼は労働者の文化的水準向上のための努力の成果を党組織がならん報告もしていないと現状を指摘して、次のように論文の意図を明らかにする。労働時間短縮の獲得の闘争の中で企業家や俗物は「労働者の余暇は酒か賭博で浪費される」という議論を提出した。この議論をその後の事実で反証した運動の到達点を明らかにするのが本論の意図だ、と。具体的な項目を示しながら内容を要約しよう。まず労働者禁酒運動の発展について。ここでは禁酒クラブの数字上の成果だけでなく、主要には労働者の飲酒習慣・倫理の全体的変化こそが大きな達成点である。次に自然活動の発展について。旅行クラブ「自然の友」はもっぱら労働者からなり、その指導者はわが信任者の手にある。ウイーンやシュタイヤーマルクのクラブ「子供の友」やベームンのわが婦人組織と体育クラブが労働者子弟を自然に連れ出し、青少年労働者には青年組織が同じ活動をする。自由の中ですこす日曜日の意義が自覚される。国内・外へのクラブ、団体旅行が分割払いで行われるようになった。ウイーンには自己所有の水浴場をもつ労働者水泳クラブ(例えばクラブ「シュレーバールテン」)がある。「これらは全て労働者が資本主義的搾取から闘い脱したわずかな自由な時間を有益に文化的に価値ある形で使っていることの証明

である」。党大会で常に報告される教育活動は実に大きな成果をあげたとして以下の事例が示される。講演会の整備、労働者文庫の集中と改良、スライド装置の入手・活用、ウィーンやグラーツのクラブ「自由民衆舞台」。労働者シンフォニーコンサートは労働者が芸術の享受をゆくりとわがものとしたじびてゐることを示している。労働者祭でも労働者の趣味の改善が反映し、歌唱クラブのリサイトで批評の基準がつくられてプログラムが改良され、有害なディレクタントを防止した。「飲み屋に行く代りに劇場に、飲酒の代りに読書ワグネルが徒歩旅行がますます階級意識ある労働者の標語となった」。最後に、「労働者がスポーツ活動に向かったかぎりですえこれは労働者階級の喜ぶべき文化的成長として歓迎」され、労働者体育クラブ、アスレティッククラブ、フットボールクラブ等の例を挙げる。総括して次のように言う。これらの運動は「二〇年以上も、単に労働関係の改善によって労働者階級を直接的に肉体的に強化し闘争能力あるものにしてきただけでなく、労働者がその自由な時間と賃銀を可能なかぎり文化的に使い、そのために彼らの私的・社交的生活を通じてより高度な文化水準で間接的に肉体的と同時に精神的により闘争能力あるものになるための先見的配慮をしてきたのであった」。

4

戦後四篇は『カンパ』誌面拡大にに応じて、一篇を除き、長大

である。その全てがオーストリア労働者スポーツ運動の確立と発展に対応して理論的基礎を与えようとしており、運動史を研究するうえで格好の材料を得ることができる。

戦後の社会化運動とともに民衆の体育分野に鋤を入れ、民衆体育活動計画を提起したT・ベルナッツ「身体鍛錬の社会的問題」(一九一九年)から、戦前のスポーツ運動の限界と民衆体育活動計画の課題を知ることができる。まず前者について。弱少クラブから全国規模の連盟になる団体が純粹に私的なイニシアティブによって形成され、健康スポーツとしても競争スポーツとしても(前者は後者の必然的・自然的補完だという)、精神と身体の調和的形成という死んだと思われたギリシア的理想を現代において蘇生させたスポーツ運動が成立する。が、この運動は民衆の一部に制限され続けた。それは主として旧オーストリア当局の怠慢の結果だが、当時の議会支配政党的怠慢にも、社会民主党も体育の社会的問題を二義的課題としたことにも原因がある。その中で労働者のある部分が先駆的に働いた——労働者スポーツ団体の創設。しかし、この労働者スポーツ運動は、労働者階級の既存の労働・生活関係と政治的關係とによって制約され、身体的自己教育の意志を強くもつ相対的に少数の人々だけの問題となった。さらに運動の拡大を阻止した要因に、階級意識ある労働者が既存の、場と手段を所有する「非政治的」スポーツ団体に否定的態度をとったことも挙げられる。戦後の大きな状況の変化は、労働者スポーツ団体の会員が一〇万人を越したことで、体育に対する国家・官庁の態度が本質的に変化し、

専門部門の設置、報告がなされるようになったことに見られるが、最も重要なのは全ての労働者・兵士スポーツ団体が一大目的の組合に結集したことである。これらによって民衆の体育のための組織がほぼ存在することになった。さしあたり妨害となるのは国家の財政状態と保守的な公務員団体だが、それ以上に重大なのは、大規模で統一的で明確な意見をもった活動計画が欠けていることである。その計画の課題は大きく二つある。一、都市プロレタリアートの地方・自然への誘導。二、都市郊外内・近辺での十分な身体的活動の機会づくり。とくにこの課題の解決のために具体的な課題が提案される。スポーツ施設計画と利用プラン。「体操教師」でない専門教師の大学での養成と学校体育改革。近代的水浴場建設。ここではその詳細は省かざるをえない。論文は、次のような展望を示して終る。広範な住民は長い視野でのこの仕事の価値をただちには認識しえないだろう。おそらく従来支配的政党によってこの分野で殆ど何もなされなかったことに原因がある。目前の収益性の原理を知らぬ社会主義だけがこの課題解決の使命をもつ。その完全な解決は社会主義国家において初めて可能である、と。

5

J・ハナクは「身体鍛練の合同化」(一九二〇年)と「新しい権力」スポーツ—ウィーン労働者体育・スポーツ祭典によつて」(一九二六年)の二つの論文を書いている。第一論文はV A S創設を、第二論文は副題通りA S K Ö初祭典を意義づ

けたものである。しかし内容は資本主義とスポーツとテーマ化した方が理解しやすい。第一論文では主にアマチュアリズムが、第二論文では独特な「スポーツ資本主義」のカテゴリーが、スポーツイデオロギー論の中心となり、それに対抗する労働者スポーツ思想の核心を示すという構成をとっている。第一論文は、主体の側の大衆スポーツ、社会的スポーツへの欲求と、客体の側の絶対的困窮と需要の最低数しか充足しえない傾向とによる対立物の生成、すなわち「プロ・スポーツと記録スポーツという少数の芸術的身体運動」の発生という視点で、スポーツ、特にフットボールの精神史の発展過程に即して資本主義的發展と自己解体の内的推進力を解明しようとした。富者と権力者の奢侈享受とスポーツ複合体の受動的側面たる観衆とがスポーツの二重の根源であり、能動的側面は資本主義の下でプロ・スポーツマンと「奢侈スポーツマン」に分化する。その他の民衆は見るだけとなる。スポーツマンの両群は社会的目的、社会階級出身経済的機能において異なるが、関与する「素材」、スポーツ技術は共通であり、報酬の有無だけが外見的区別を与える。ここで資本主義的イデオロギーの新解釈としてアマチュアリズムが成立する。このスポーツの法律的上部構造の階級性は明白である。(その詳細な記述は省く。現代のアマチュアリズム論とはほとんど変らない。)大陸でのプロフェッションナリズムの導入はイギリスほど進まない。余剰の労働力をスポーツにつき込むほどの産業予備軍の大きさが無いから、「アマチュア」に甘んじる。他方、大陸のスポーツ上層部もイギリスほど多数でも裕福でも

なく、貧困層からの援助なしですますか、これを余儀なく認めるときは「アマチュア」の厳格な紳士法といつまでも友達づきあいできない。したがって、大陸でのスポーツの発展はアマチュア法との不断の衝突の悲喜劇であり、結局は階級的恣意に従って解釈しようとする弾性ゴム条項のトルソーしか残らない。アマチュアクラブ経営の費用の増大と公衆によるその費用の支払いの相互作用によって、つまり公衆は最高競技者の試合に関心をもち、クラブは「選手チーム」の欲求にかりたてられることによつて、小群のスポーツ芸術家に尖る発展の型が生まれる。競技者遍歴の開始と民衆放置、偽アマチュアリズムの横行。だが、これを克服すべき真の民衆スポーツの思想もたちおくれた。戦前は若干の貧しい小さな労働者クラブしかなく、それには手段も党とその機関紙による道徳的支持も欠けていた。しかし今や「労働者・兵士スポーツ連合」が、(できるかぎり全ての人々が合理的な身体鍛練の機会を得ることを基本線にして)創設された。この組織化は土地の社会化と身体養生の国有化を政治的核心としてもち大衆の革命化に寄与するであろう。社会主義の自由への道は大衆の身体鍛練の自由へと通じる。以上のように論じたのであった。

ハナクは第二論文で独特な「スポーツ資本主義」のカテゴリーを提示した。それはブルジョアスポーツの墮落を表現するものであり、さらに戦後社会生活の諸現象を貫く運動原理としての「スポーツ主義」というカテゴリーにくくられる。「スポーツ資本主義」はスポーツという複合体を普遍的文化との連関

から裂き取ってしまう。それにとつてスポーツは物そのもの、非政治的なものである。スポーツは資本主義にとつて精神的重力喪失の従順な手段にもなる。記録の思想が精神の付加を排除する。無精神それ自体の思想! この重力喪失、この一切の事的規定性なしで済ませること、形式以外の何物でもないもの、あらゆる頭脳——天才も白痴も——の形式を受けとるような能力、が世界中を凱旋する。労働動機としての記録原理の貫徹によつて労働者スポーツから「労働スポーツ」(比喩でなく、作業競争の事例を挙げて言っている)さえ生じる。「スポーツ主義」は記録の思想なのである。この典型像をハナクは、フットボール記録を保有するためだけにハンガリーのキリスト教徒を買いとつたユダヤ民族スポーツクラブ「ハコー Herold」の例で描いている。前述した通り、スポーツ主義では文化の普遍的シェーマへの編入のあらゆる試みが挫折する。政治、民族、道徳、知識に対するその絶対的「中立性」は、とらえどころなくあらゆる実質的な規定可能性から挽ぎ離されるから。それは形式的エレメントとしてア・プリオリにわれわれの文明に染み透り、まさにそのためにその外部でそれに対立する。また、それは単なる形式として全ての文化内容から区別され、かつ区別されざるをえず、それによつてのみ偉大も普通も、卓越も茶番もその適応能力の妥当範囲に編入することができる。そのかぎりでスポーツ主義の論理は貨幣の論理である。労働者スポーツ運動はスポーツを文化の構成員としてそれに対抗しなければならぬ。ブルジョアスポーツの方でも多くの状況におされてその

イデオロギー的構造の洗練化を開始した。クラブ相互の猛烈な競争、公衆の支払能力の衰弱によって、一方でスポーツ資本主義はその情報のセンセーションと神経刺激をますますたけり狂ってせり上げることを強いられるが、他方で——全く弱い萌芽であれ——スポーツがかつてそこから出奔した精神的內容に再び接近することを強いられ、純粹スポーツ的なものを越える空間を与える試みが生じる。だが、スポーツと文化の真のかけ橋となるのは労働者スポーツ運動である。文化生活に根ざさないブルジョアスポーツは今日の経済的衝突によって吹き消されるだろうが、労働者スポーツは根なしでなく、内容的に空虚でなく、労働者階級の文化意識に深くつなぎとめられるからである。以上でみるかぎりハナクの展開の特徴は、スポーツ（ブルジョアスポーツでさえ）をゆがめるのは資本主義であり、それはまたスポーツの発展の推進力ではあるが文化から疎遠になるスポーツを消し去る力であることの論証にある。だが、彼のいう「大衆スポーツ理念の悲劇」を克服する真の民衆スポーツ思想の展開はこの論証だけでは不十分だと思われる。

## 6

最後の論文、H・ガストグープ「パンと曲馬」(一九三三年)は右に述べたことの傍証を与えてくれる。それは、社会主義者にも根強く存在した民族主義とその根源にある政治と文化の二元論を、具体的事例によって批判したのであった。民族主義的発作を起こさせたのは、ロンドンでのイギリス対オースト

リアのプロ・フットボール戦であり、イギリスの辛勝に終ったが、ドルフスからオットー・パウアーまでオーストリアのプロ選手を「名替ある」敗け方をしたと賞讃し、社会主義的新聞も含め全新聞が十一人のプロを民族的英雄とちあげたのである。パウアーの議会発言など詳細は省くが、ガストグープは次のように述べる。ブルジョア階級の感激は不思議ではない。不可解なのは社会民主主義者の近視眼だ、彼らはブルジョアスポーツの国粹主義的いかさを見抜けずセンセーションスポーツに屈服している、と。その原因は党の文化綱領からも労働者スポーツの原則からも逸脱したところにある。政治的領域で社会主義的方向を追求しながら、文化的にブルジョアイデオロギーを正当なものともみなすことはできない。労働者階級解放の立場ではスポーツも中立的領域ではなく、ブルジョアイデオロギーから離れ独自の社会主義的政策を行う分野の一つである。労働者スポーツ運動の立場も誤解されている。ここでは個々の競技者としてのプロ・スポーツマンに反対する闘争が行われるのではなく、その階級支配をスポーツにおいて保持するためにプロ競技を利用するブルジョアスポーツ運動と闘かうのである。スポーツは人民の財産になるべきものだから。だが、一方でブルジョア世界による労働者階級弱体化の追求と、他方でプロレタリアートによるその助長(ブルジョア的理念に主として文化的領域で屈服し、明確な社会主義的文化政策を追求しないことによる)が政治的無関心をつくりだす。人民のためのパンと曲馬、だが支配階級の力、資本主義的な大きな希望の玩弄物としての

人民。労働者スポーツはこの分野でブルジョア階級のプランを粉砕する最も有効な形式であり、大衆スポーツを政治的啓蒙と結合する運動である。ガストゲーブはこのように述べて、焦燥が感じとれるよびかけで結ぶ。「気晴しのための遊戯やスポーツではなく、政治的・経済的・文化的反動と資本主義を克服しうる精神的・肉体的に闘争能力あるプロレタリアートを教育するという認識でのスポーツを」

7

本稿の目的は『カンパ』論文の内容を紹介し、運動史の証言として今後の研究に役立てることであった。私見では労働者スポーツは単に労働者のスポーツではない。それは、現代のスポーツの主体が国民諸階層でありながら、真にスポーツ主体たりえていない主體的・客体的条件を克服する「権利としてのスポーツ」の歴史的先駆形態である。その運動史はスポーツ主体形成史であり人民スポーツ思想形成史である。その実証研究においてオーストリア労働者スポーツ運動史がいかなる問題性を秘めているかを見出しつつその歴史的具体像を描くことが今後のテーマである。

\* Der Kampf. Sozialdemokratische Monatschrift.  
Jg. 1 bis 27 (Wien, 1907—1934) — 創刊時の編集者オ  
ットー・バウアー、アドルフ・ブラウン、カール・レムナ  
ー。

(1) Hans Gastgeb, Der Arbeiterbund für Sport und Körperkultur in Österreich. In: Festschrift zur 2. Arbeiter-Olympiade Wien 1931, S. 51—55. なお第二次大戦後に次の単行本が出版された。Hans Gastgeb, Vom Wirtschaft zum Stadion. 60 Jahre Arbeitersport in Österreich. Wien 1952. 本学図書館に収められる予定だが、未見。

(2) この地区区分については次の資料を参照。Geschäftsberichte über die Jahre 1928/29 des Arbeiter-Turn- und Sportbundes, E. V., Leipzig 1930, S. 293ff. u. S. 297ff. 労働者体育家が依然としてドイツの同盟組織に組織されかつオーストリアの全国組織を構成したその二重構造の解明は、ドイツ労働者スポーツ運動史研究でも与えられてい  
なす。

(3) ASKÖ内最大団体は「自然の友」。公式の機関紙は一九二九年創刊の「Volkssport」であった。なおドイツではのAS I会長として次の著作を書いた。Julius Deutsch, Sport und Politik. Im Auftrage der Sozialistischen Arbeiter Sport-Internationale. Verlag J. H. W. Dietz Nachfolger, Berlin 1928.

(4) Eduard Stojetz, Soll der Arbeiter Sport treiben?, Jg. 2, 10. Heft. 1. Juni 1909, S. 473—474.

(5) Ferdinand Reinhold, Ein Massensport. Jg. 5, 11. Heft. 1. August 1912, S. 519—521.

- (9) Karl Cernak (Tieplitz), Kulturelle Leistungen der Arbeiterbewegung. Jg. 7, Nr. 9. 1. Juni 1914. S. 427—430.
- (10) キーストリン労働者文化工作キーストロ・パンナム組織の關係を研究した次の文献の檢査は別の機会にしよう。  
Alfred Ploser, Literatur und Austromaximus, Wien 1980. Ernst Glaser, Im Umfeld des Austromaximus, Europaverlag Wien 1981.
- (11) Theo Bernatz, Das soziale Problem der Körperlichen Erthüchtigung. Jg. 12, Nr. 14. 5. Juli 1919. S. 442—449.
- (12) Jacques Hannak, Die Vererbung der Leibeserthüchtigung. Jg. 13, Nr. 4. April 1920. S. 159—164.
- (13) Hannak, J., Die neue Großmacht: Sport—Zum Arbeiter-Turn- und Sportfest in Wien. Jg., 19. Nr. 7.

July 1926. S. 273—280. ハナニヒサキ・パンナム  
註文あり。Hannak, J., Karl Renner und Seine Zeit.  
Versuch einer Biographie. Wien 1965.

(11) Hans Gastgeb, Panem et circenses. Jg. 26, Nr. 1.  
Januar 1933. S. 36—38.

(12) ユーゲン労働者スポーツ運動史研究の中で、ワイマール共和国時代の運動の具体像を描く試みとして参考になるのが、Horst Ueberhorst, Bildungsgedanke und Solidaritätsbewußtsein in der deutschen Arbeitersportbewegung zur Zeit der Weimarer Republik, In: Archiv für Sozialgeschichte, XIV 1974. S. 275ff. キョロホネやた直田教育活動の内容や労働者キリハンマンの一層の究明をこの課題にする。

（一橋大学助教授）